

畫ノコトニテ、此度ノ如キ音シテ飛物シタルガ、八王子農家ノ畑ノ土ニ大ナル石ヲユリ込タリ、其質燒石ノ如シトテ、人々打碎テ玩ベリ、今度ノ碎片モ同ジ質ナリト見タリシ人云キ、昔星殞テ石トナリシ杯云コトハ、是等ノコトニモアルヤ、造化ノ所爲ハ意外ノコトナリ、前ニ云フ七八年前ノ飛物ハ、正シク予浦清ガ中ノ者見タルガ、其大サ四尺ニモ過ギナン、赤キガ如ク、黒キガ如ク、雲ノ如ク、火焰ノ如ク、鳴動回轉シテ中天ヲ迅飛ス、疾行ノアト火光ノ如ク、且ツ餘響ヲ曳クコト二三丈ニ及ベリ、東北ヨリ西方ニ往タリ、見シ者始ハ驚キ見キタルガ、後ハ怖テ家ニ逃入り、戸ヲ塞ギタレバ末ヲ知ラズト、林子ノ言ヲ得テ繼ギシルス、

〔兔園小説七集〕金靈并鯉舟の事 今茲乙酉春三月、房州朝夷郡大井村五反目の丈助といふ百姓、朝五時比、苗代を見んとて立ち出で、こゝかしこ見過し居たるをり、青天に雷のごとくひびきて、五六間後の方へ落ちたる様なれば、丈助驚きながらも、はやくその處に至り見れば、穴あり、手拭を出だしてその穴をふさぎ、おさへて廻りを掘りかゝり見れば、五寸程埋まりて、光明赫赫たる鶏卵の如き玉を得たり、これ所謂かね玉なるべしとて、いそぎ我家へ持ち歸り、けふはからずも、かゝる名玉を得たりとて、人々に見せければ、是やまさしくかね玉ならん、追々富貴になられんとて、見る人これを羨みける。略中 文政八乙酉初秋朔 文寶堂誌

〔義演准后日記〕慶長元年六月廿七日、霽、午半刻ヨリ、噓者、土器ノ粉ノ如クナル物天ヨリ降り、草木ノ葉ニ相積テ曾以不消、大地只霜ノ朝ノ如シ、不可思議、恠異非只事、四方曇テ雨ノ降ガ如シ、今日伏見へ唐人御禮云々、若左様ノ故哉、尤不審々々、閏七月十四日、霽、天ヨリ毛降、似馬尾、或一二尺、或五六寸計也、色ハ白黒又赤色ナリ、京都醍醐同前ニ降、

〔遊藝園隨筆〕六月天保十九日夜、一頻雨ふりたりしは、深夜如夢に覺たり、同廿日退出より、新家榮之助、飯田町もちの木坂へ轉宅の賀として参りしに、昨夜か曉かはえらす、毛ふりたりとて、拾